



笑わせて笑わせて  
ゾツとさせる！  
絶妙のギャグで現代を  
えぐる生涯の最高作！



1952年度〈キネマ旬報〉  
ベストテン第1位

製作・脚本・監督・主演  
チャールズ・チャップリン

マーサ・レイ  
マリリン・ナッシュ  
マディ・コーレル  
インベル・エルソム  
アダ・メイ  
マーガレット・ホフマン  
バージニア・プリサック  
チャールズ・エバーンズ



# チャップリンの 殺人狂時代

〈ビバ！チャップリン〉第6弾！原案オーソン・ウェルズ 撮影ロリー・トザロー 作曲チャールズ・チャップリン



11月9日 金 10時 ロードショー ★ 有楽座 (591) 5351

# かいせつ

名作ぞろいの《ヒバノチャップリン》シリーズの中にあつて最高の讃辞を浴びる希望の第6弾である。チャップリンが1947年、「独裁者」につづいて発表したもので、わが国では昭和27年(1952年)に公開され、異色なテーマ、ラスト・シーンでの名セリフなどでセンセーショナルな話題をよんだ。

そして、その年のキネマ旬報ベストテンには、「第三の男」天井棧敷の人々」など映画史をかざる名作をしのいで、見事第一位を獲得した。

原案は「市民ケーン」のオーソン・ウェルズ。チャップリンはこの近代の《青髯物語》を作ろうと思いついてから、丸2年間をシナリオの執筆に費やした。書き加えたり、削ったりを幾度もくりかえし、訂正に訂正を重ねて、大体のシナリオが出来ると、彼は主な配役の俳優を集めて各役のリハーサルをやつてみて、実際の立場から台詞の修正を加え、改めてすっかり完全なシナリオに書きあげたという。

また役作りの段階で彼は、19世紀の大山師で殺人犯のトーマス・ウェンライトや、フランスの青髯」として有名なランドリユなどを研究、大いに参考にしながら、スクリーンに主人公ベルドゥ氏をよみがえらせた。

これだけみても、チャップリンのこの作品に対する意気込みはわかうというものだが、それ以上に慎重を極めたのが配役である。

清楚な魅力あふれるヒロインには、新人マリリン・ナッシュが幸運をつかんだのをはじめ、共演陣には、有名な喜劇女優のマーサ・レイ、舞台からマディ・コレル、イソベル・エルソムなど、ベテランが顔をそろえ、熱演を競い合つてゐる。

撮影はロリー・トザロー、音楽の編曲と指揮はルドルフ・シュレーガー、美術はジョン・ベックマンであるが、音楽のスコアはチャップリン自身で書き、撮影のアンクルから、42のセットのデザインから、衣裳、小道具に至るまで総てにチャップリンの眼が行きとどいてゐることはいうまでもない。

上映時間・2時間4分



# チャップリンの殺人狂時代

製作・脚本・監督・主演・作曲■チャールズ・チャップリン  
原案■オーソン・ウェルズ/撮影■ロリー・トザロー/東和提供/アメリカ映画

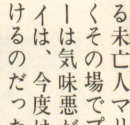


## ★ダンディ・チャップリンの華麗な愛と殺しの遍歴

■アナベラの場合  
海水からガソリンを探る話などにすぐ、夢中になるお人好しのアナベラ。ちよつとおつちよちよだだが夫のボート船長を心から愛して、本物の貨物船の船長だと信じて疑われない。当のボート船長と云えば、たまに帰つてくると買ったばかりの宝石をニセ物と勝手に決めつけて、持って行つたり、はては毒入りのブドウ酒を飲まそうとしたり、誰もいない湖のボートの上で首を絞めようとしたり、それは華麗な殺人テクニクでアナベラにせまるのだったが……。



■マリーの場合  
フランス南部の小さな町の郊外、バーネイの別荘ではゴミ焼場の煙突がもう三日も煙を吹き続けて、近所の人々の不審をかっていた。最愛の妻を失なつたバーネイは、思い出に満ちたこの別荘を売りに出していた。その最初のお客が、どことなく気品のあつた未亡人マリイだった。バーネイが関心をもつたのは云うまでもない。さつそくその場でプロポーズ。だが、あまりにもせつかにコトを急いだためにマリイは気味悪がつて帰つてしまつた。その後、街で偶然マリイを見つけたバーネイは、今度はじっくり攻めることにして、高級な花屋から週二回花束を贈り続けるのだった。甘く、優しい愛の言葉を送つて……。



■リディアの場合  
ベトナムから三ヶ月ぶりだ夫のフロレイが帰つてきたというのに少しも喜ばないリディア。がっちりためこんだ小金を銀行に預けて、逆にフロレイのだらしないさを攻めめあるさま。商社マンのフロレイは、そんなリディアにありもしない銀行の取り付け騒ぎを理由に金をおろすように説得した。株ですつかりスツた彼にはリディアの七万フランは喉から手を出してもほしいのだ。波々銀行からおろした札束を間に、その夜二人は、珍しく仲睦まじく語り合ふのだった。



■美しい少女の場合  
殺しても絶対判らないと云う毒薬を手に入れたベルドゥ。ある雨の夜、街で見つけた少女を実験台にしようかと家に招き入れた。少女は、出獄したばかりで、行くアテもなく街をふらつてゐたのだ。食事を作つてさし出したベルドゥに美しい微笑みを返す少女。やがて、病気で死んだ夫への愛を熱く語りつづける少女の清い心に出たベルドゥは、毒入りのブドウ酒をとりかえ、いくらかの金をもたせて送り出すのだった。その少女と再びめぐり逢うとは……。



■そしてベルドゥの家では……  
静かな田舎の家に車椅子にかけたきりの妻と六つになる男の子がいるセイルスマンのベルドゥ。帰つてきたと思えばすぐまた、仕事に行つてしまふ夫との生活だが、幸せな満ち足りた日々を送る妻と息子。



三十年間正直に勤め上げた銀行をクビになつてしまつたベルドゥだが、今、やつと見つけた新しい仕事も順調で、平和な家庭に恵まれ、大ハリキリの毎日だった。さて、明日の仕事は北か南か、それとも……。

やがて世界は第二次大戦の戦火の渦にまきこまれて行つた。ベルドゥの平和な小さな家庭も壊されてしまい、生きる意味すら失くした今、自らの罪から逃れられないことをベルドゥは悟つた。